

第5回

## 日野川流域の古城

日野川流域には数多くの古城跡が見られる。築城の時期は応仁の乱以降戦国時代にかけてであるが、この地方が出雲の国境に近く、軍事境界地域として武将の抗争が絶えなかったからである。加えて日野川上流地域が良質の山砂鉄を産出し、たたら製鉄の中心地であったため、その争奪をめぐる戦い、さらに日野川筋が山陰と山陽を結ぶ重要な交通路であったからである。

日野川流域の古城跡を町別に見ると、次のようである。

①米子市		11
②南部町	会見町	11
	西伯町	9
③伯耆町	岸本町	3
	溝口町	13
④江府町		10
⑤日野町		23
⑥日南町		39
計		119

『県中世城館分布調査報告書』

ところで日野川流域の古城の特色としてあげられることは、

①山頂または山根を削って平地を作り、ここを郭とする。

②切岸や堀切が見られる。

切岸は自然の斜面を険しく急傾したものであり、堀切は尾根の鞍部をさらに掘り窪めたものである。

③土塁や石塁はほとんど見られない。

中世の古城跡は、自然地形を大幅に変更せず、どちらかといえば人の手をあまり加えない自然に近い形だと云い得る。

そうした中であって、河川を防禦線として、また物資の輸送路として利用した幾つかの城がある。江美城、黒坂城、法勝寺城、さらには日野川が転流する以前の尾高城などはその代表的な城であろう。

江尾は日野郡の咽喉部に位置して、奥日野や山陽と山陰海岸部、さらには大山寺と結ぶ交通の要



日野川と黒坂陣屋の図

地である。ここに築かれた江美城は日野郡内で、最も重要であり規模も大きなものであった。

江美城は東から日野川に迫り出した比高約80mの舌状台地にあり、台地端を切り割って本丸がある。城の北側には東に向かって走る道があり、大山へ通じていて、これが城下の主要道でこの道をはさんで城下町があったといわれる。それと十字に交わる南北の道は南へ行けば日野川に添って奥日野へ、北へ行けば西伯へ出られる。

本丸の南に本丸とほぼ同じ高さで、大きさも同じ位の兔丸があり、南谷川の谷を隔てて本丸と並んでいる。その南麓を俣野へ通う道が通っていて作州へ向かっている。

本丸の北に離れて銀杏の段というのがあり、この段の南の切岸を舟谷川(江尾川)が流れ北の切岸には小江尾川が流れている。両川を堀とすれば本丸よりも堅固である。こうした複合的な城構えが江美城のもつ守りのかたさであったが、永禄8年(1565)尼子方の城主蜂塚右衛門尉は杉原盛重に攻められて滅んだ。

こうした古城の在り方は河川を防禦線と頼む黒坂城でも法勝寺城においても見られる。

法勝寺城は中谷川と東谷川が合流する地点の比高10mばかりの低丘陵上にあって、やはり川に添って奥日野、さらには山陽と結ぶ主要街道に望んでいる。中谷川に添って南へ延びる道は日野郡の多里を経て三次、広島に至る備後道であり、東谷川を東に向かう道は山陽側と出雲の富田城を結ぶ富田街道であった。

日野川流域に分布する古城にとって、日野川のもつ意味は戦時には防禦のかなめであり、平時においては物資の輸送路であってその存在は大きなものであった。